

相模国府津

(小田原市国府津 眞樂寺境内)

きみようどう きみようせき 歸命堂・歸命石の由来



歸命石

眞樂寺には十字名号（歸命盡十方無碍光如来）と八字名号（南无不可思議光佛）が刻まれた「歸命石」と呼ばれる大きな石が伝わる。蓮如上人の孫にあたる顕誓（光教寺（号は光闍坊）の住持蓮誓（蓮如上人4男）の3男）著の真宗史である『復古裏』や江戸期編纂の『二十四輩巡拝図會』『新編相模風土記』などには親鸞聖人が国府津滞在の頃、御勸堂下の唐澤海岸に『一切経』を積んだ大陸（唐の国と大宋の2説あり）からの船が着岸し、その船底に積まれていた8枚のバラスト石の1枚に親鸞聖人が十字八字の二尊号を書かれたものであると伝える。

伝説ではその石が海辺に打ち捨てられており、「然るに此石、時として自とふるひ動きて響の聲を出せり このゆえに諸人大いにあやしみを成せり いかなる石にてや候べき……。」（『二十四輩巡拝図會』）と村民に「此の震え音を出していた石は何ですか？」

と訪ねられた聖人が「この石は天竺国より大蔵經とともに運ばれてきた天竺石である」と仰られ、指先で十字八字の二尊号を書かれると震え音を出していた石が静まったと伝えられている。

その後、眞樂寺境内に宗祖が帰洛の際に教えを忘れぬようにと残されたそうである。

歸命堂

初代歸命堂は東本願寺13代宣如上人により雨曝しになるのは忍びないと堂宇を建立していただいたものである。

幕末の頃の眞樂寺火災に遭い黒焦げになってしまい、その後風化をさける為に、昭和6年、眞樂寺門徒と国府津の有志者によって修復されたものです。それが現在の歸命堂兼宝物堂です。初代歸命石は堂宇下に埋められ、今は目には見ることが出来ませんが、歸命堂内にはその複製と拓本が残されている。（この際に塩害の進んでいた勸堂の法宝物も移された）